

## 第114回「さんか・さろん」まとめ

・2022年1月18日

・「コロナ後を見据えたまちづくり」

・増田寛也さん

スローライフ学会会長、東京大学公共政策大学院客員教授、日本郵政(株)取締役兼代表執行役社長

.....  
この日の「さんか・さろん」は、75名の参加。前半で昨年11月に開催した「スローライフ・フォーラム in 十津川」の報告がありました。奈良県十津川村村長はじめフォーラムに参加された方々がそれぞれに今一度、その感想を述べた後、増田寛也さんの登場となりました。  
.....

.....  
昨年の11月、感染者が非常に少ない、ピンポイントをぬうような形で、十津川村でフォーラムが出来て良かったです。私にとりましては行くたびに新たな発見があります。以前、時間的に訪問できなかつた、念願の「果無(はてなし)集落」に行くことができました。朝のすがすがしい中で集落を見ることができました。街道を使って多くの



人たちが行きかう、そこに、まさに素晴らしい世界が広がっているということを改めて感じました。

今日は「コロナ後を見据えたまちづくり」というタイトルにしてありますが、これからのこと、まちづくりについて、今、考えていることをお話ししようと思っています。

### <コロナを経験することにより>

コロナを経験したことによって、時間、場所にとらわれない働き方が可能になりました。場合によっては、場所というのは世界どこでもと広がっていくことになります。また、一度に複数の活動を行うことが可能になって、住んでいるところの市民の活動をして、空いている時間にオンラインで別の活動に参加も可能になりました。

.....

ここで注意しなくてはいけないのが、日本郵政の下にある日本郵便の手紙や、荷物を配っている人たちがまさにそうなのですが、オンラインでいろいろ可能になったといいつつ、エッセンシャルといわれている仕事に携わっている人たちは従来と同じような働き方をしなければ

### コロナを経験することにより

◎デジタル、オンラインの活用により

- ・時間と場所に囚われない働き方が可能に
- ・一度に複数の活動を行うことが可能に

◎リモートワーク、ワーケーションで

- ・多地域居住、多地域就労が現実のものに



関係人口の概念が、一層重要に

ばいけない。オンラインの活用によって働き方を変える人というのは、たぶん人数的に全体の中ではまだまだ半数に満たない少数派の場合が多い、そのあたりは十分に注意して見て行かなくてはいけないと思います。

ただいずれにしてもコロナを経験することによって、リモートワークは盛んになり、造語ですが“ワーケーション”、ワークとバケーションのことですが、南紀白浜や蓼科など自然環境のいいところで、仕事をしながら、その後の活動や生活も楽しもうという人が増えました。多地域居住や多域就労というのが、そういう人たちのなかでは現実になってきています。

したがって、関係人口が大事になります。地域の特産品を購入したり、ふるさと納税が以前よりもずっと増えてきていますが、これは本来の使い方とはちょっと違う方向にいつているのは事実ですが、そういった地域への寄付だとか。それから頻繁な訪問ですね。何かの理由で繰り返し、その地域のリピーター化する。またはボランティア活動、といったようなことを通じて。だんだんに準定住化から定住化、ということに繋が

っていけば。関係人口という概念が重要になってきているのが、今の状況ではないかと思います。

## <ゴールをどこに設定するか>

自治体の関係の方とか、まちづくりを考える方々にとって、ゴールをどこに設定するかというのが、コロナを経験した後もう一回少し考える必要があると思っています。

地方創生という言葉がありますけれど、何を指して、何を目的とするのか、ということ。ややもすると、住民数、言葉を変えると定住人口を増やそう増やそうと。いろいろな人たちがいればそれだけ楽しいですし、人口がどんどん減っていくというのはさびしい気持ちにもなりますから、人口増を狙うという気持ちが出てくるのは自然なことだと思います。実際には定住人口というのは、これからほとんどの地域で増えてはいかないと思います。それを増やすという目的を掲げるのは非常に難しい。

では先ほどいった、地域に何らかの関係を持つ関係人口が増えればいいのか。さらにいうと関係人口は完全なリモートでも、何か地方を応援するという活動をすればそれでいいのか。またはリアルな生活実態がないとダメなのか。一時、そのところに顔を出すようなリアルな活動がないとダメなのか。このあたり答えがなく、目指すべきゴールは各地域によって全く異なる。つまり一人一人の考え方がたぶん違って来るだろうかと思っています。

---

### ゴールをどこに設定するか

◎地方創生は何を目指すのか、何を目的とするのか

例えば ・住民数(定住人口)が増えれば良いのか

・関係人口が増えれば良いのか

・関係人口は完全なリモートでOK?

or  
リアルな生活実態がないとダメ?

◎目指すべきゴールは各地域によってまったく異なる

### デジタルを活用し、まちづくり

◎物理的距離の概念が変容

◎しかし、デジタル技術はあくまで手段

◎どんな課題を解消し、どのようなまちづくりを目指すのか

---

ただその違いも念頭にいれつつ、まちづくりを議論することをしておかないと。以前はどうしても人口増を目指そうよ、ということが20年30年前には暗黙の了解になっていたような気がするのですが、ここをもう一回確認する必要があります。答えは一人一人の頭の中にしか多分ないと思いますが、それを無理やり調整する必要もない。ただどういうゴールを自分としては考えるかを、もう一回考え直すことが必要です。

### <デジタルを活用したまちづくり>

デジタルを活用したまちづくり、これはひとつやり方はあるかと思えます、物理的距離の概念が変わってきますので。

以前は近所の診療所というよりはもう少し高度医療というか、二次医療とかを面倒みてくれる病院がやはり近所にないと、特にだんだん年をとってくると心配だということでした。まちづくりをしていくうえでそうした医療機関や、またデパート、図書館、大学、そういうものをどのように生かしていくか、というのがこれまで重要な要素だったと思うのですが、それを支配していた距離というのがだいぶ変わってきています。

- ・居住人口や関係人口を増やすことは重要だが、それだけがターゲットではない
- ・多様な人、多様な知恵が集まることによって仕事生まれ、波及効果も生じる
- ・オンラインによる参加者も含めて、いかに多様な人材、多様な知が集う仕掛けをつくるかが重要
- ・リアルに会い、リアルに信頼関係を構築することはとても重要だが、一方で、100%その地域でリアルな活動をしている必要はない
- ・コロナが終息し、活動抑制が必要なくなった状態をイメージして、今からまちの将来について検討すべき

例えばデパートは以前ですと30万人くらいの規模の都市でないと成り立たないといわれましたが、今はEコマースで、要はオンラインで買うわけですね。デパート自体の概念が変わってきている。そういう意味ではデジタルを活用したまちづくりというのは、役に立つと思います。

しかしデジタル技術はあくまで手段に過ぎないのであって、どんな課題を解決して、どのようなまちづくりを目指すのか、そのために何が必要なのかというのを、もう一度今までの概念にとらわれずに考えるべき。コロナ後に生活の仕方が変わってきたときに考える必要があります。

### <今後は人口にこだわらずに>

居住人口、言葉を変えると定住人口ですが、定住人口や関係人口を増やすということは、それが可能であれば意味のあることだと思うのですが、決してそれだけがターゲットではない。

当たり前のことだと思いますけれど、結局自治体同士で人口の奪い合い、というようなことが起きてしまうのはやはり避けるべきですし、人口にとられるということ、

それはこれからはむしろ避けていくということが必要だと思います。

多様な人、いろんな経験だとか、いろんなスキルを持った多様な人、多様な知恵が集まることによって仕事も生まれるし、いろんな効果も生じてきますので。

今日はまさにオンラインですけど、オンラインによつての参加



者も含めて、それからリアルな参加者も含めて、いかに多様な人材とか多様な知恵が集う仕掛けをつくるか、それが重要なのではないか。そういうことについてこの間は十津川村で、非常にいい舞台を我々に提供していただいたので、私どもも十津川という地域の持つ良さとかに触れることができました。

どういうきっかけにせよ、もちろんオンラインの採用も含めて、いかにいろいろな人材が集う仕掛けを知恵を出してつくっていくか、それが非常に重要なことです。リアルに会えるということがあればいい、そのリアルさのなかで出来上がってくるのかとは思いますが。一方でその地域で100%リアルな活動をしているということ、以前はまさにそういうこと定住人口が重要だったと思うのですが、必ずしもそういうことではない。

コロナが終息して活動抑制が終わって、自由に以前通りに活動できるようになる、今年の後半か来年かになるとは思いますが、その時に完全に元に戻るというのではなくて、活動抑制が必要でなくなった状態の時に、一体どういう繋がりをどういう仕掛けで作っていくのかを考えたいものです。

人によってはすべてオンラインは排して、リアルさが重要だと思う人もいるかもしれ

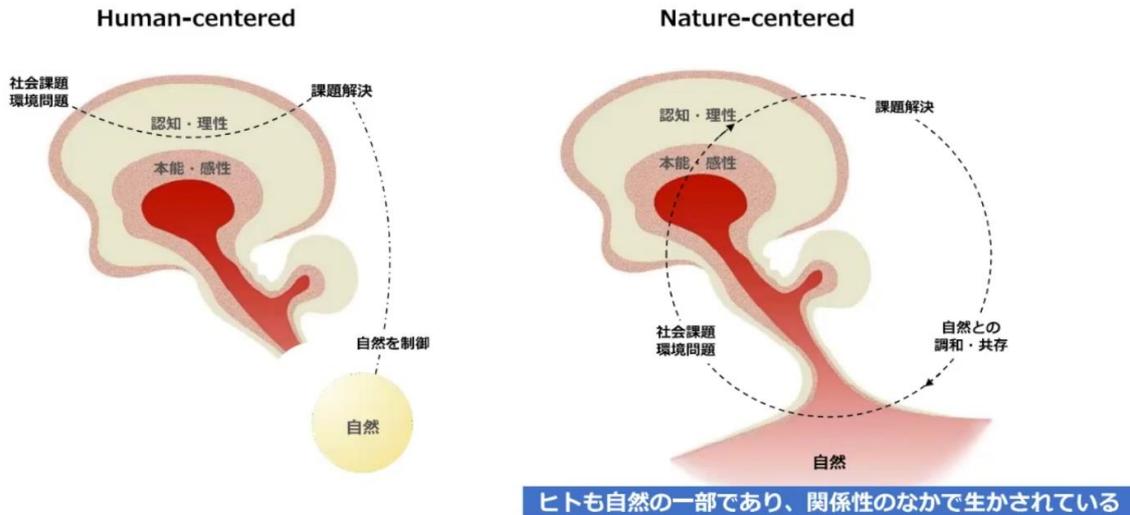
ません。うまくその両者を組み合わせるとい人もいます。限界もあるし、それぞれのやることによって違って来るかと思いますが、目標は多分一人一人違って、大きく一致はできないと思いますが、自分なりの意義を見出してまちづくりを考えていくような仕掛けができればいいな、と思っています。決して人口が少ないとかはこの際関係ないというように思います。

### <自然と調和・共存する世界>

こ子でご紹介する図の出典は東京大学先端科学技術研究センターです。ここは授業をするというよりは研究者が集まっているところ、上限10年で入れ替えていくのですが、私もこの先端研のボードメンバーになっておりまして、会議と集いに出ています。今の先端研の所長さん、神崎亮平さんがこの間説明したときに使った図です。これがなかなか面白い図だと思ってご覧いただきます。

自然と調和・共存する世界、と書いてあります。右下に、人も自然の一部であり、関係性のなかで生かされている、と書いてあります。私が受け売りのように話すのも陳腐なのですが、今までまちづくりにしても人を中心にして、人間本位のまちにしていましようとか、割と平気で使ってきました。結局それって人優位のことになっている。そうするとやはり利便性、便利さがどんどんいきわたるようになるとなる。それはそれで居心地はいいのですが、人の傲慢さが前に出すぎる。

人も自然の一部であって、関係性のなかで生かされているというのがあって、Human-centered から Nature-centered。やはり自然のなかで、人間もその中の一部分だという、そういうことをきちんと受け止



める必要があるのではないかと。そういうことをいっている図です。(一部↑)

左と右に人間の頭、脳があって、左側では、社会課題の解決をするときに、認知とか理性とか書いてあります。そういう形で理性的な形で解決を図ろうとすると、自然をできるだけ制御しよう、コントロールしよう、ということになっていきます。自然の仕組み、場合によっては法制度、人間の行動を規制するような仕組みかもしれません。自然を制御しよう、それは人間の知恵とか理性とかで多分可能だからだろうということにつながっていくのかもしれませんが。

一方で、今度は右側の方ですが、課題を解決するときに、本能とか感性、自然との調和とか共存とか書いていますが、何か物事を解決していくのに、ここでいう理性だけで自然を制御しながら課題を解決していこうということだけだと、だんだん窮屈になっていく。理性と感性が働く領域がそれぞれ違っています。感性に働きかけて、理性と感性のバランスから多様な価値を見出すという、そんなことがおこなわれるともっともっとバランスが良くなるわけです。脳の二

つの働きです。

本能や感性は人と自然との調和・共存を橋渡しする。アートは本能や感性を育む、とあります。左側から右側へと視座の転換が必要、というのが神崎先生のご意見です。私が完全にすべてを理解しているわけではないのですが、言いたいことは理屈や理性だけで全部制御しきれものではなくて、本能とか感性に働きかけて、そこから人は自然の一部であって、そういう中での関係性に生かされているなど考えていく必要があると。

まちづくりをいろいろ考えていく時に、これまでは例えば医療、医療資源が不足していればどうやって病院を配置していこうかと。それから食べていかなくてならない、産業で雇用の場をどうしようとか、すぐにそういうことを考える。

最近の火山の噴火とか、最近頻発している大雨とか地震とかへの防災機能とか、それから環境に悪いエネルギーに関して再生化由来のエネルギーにしていこうという、そういう範囲でそれを最優先してまちづくりのファクターとして考えてきたのですが、

それだけじゃなくて、科学の理性に働きかける力だけじゃなくて、もっとアートとか、場合によってはスポーツとかデザインだとか哲学だとか宗教でということなのです。

この間十津川村果無集落で、熊野古道ですから、高野山ですとか紀伊半島のなかをめぐる、古くからあるものヨーロッパにあるスピリチュアルなところにひかれて熊野古道を歩く人が多いという話がありました。

地域、まちづくりを考えていくときに、宗教とか哲学、アートだとかデザインだとかスポーツ、そういう要素をどのように取り入れていくのか、それによって理性と感性にうまく刺激を与えるようなまちづくりも必要ではないかなと思います。

十津川村ではオンラインでフォーラムに参加された方もいました、技術が進んできて、かなりいろんな十津川の良さを学び取ることができるのでは、もちろんリアルだったら一番いいのですが。昔からの歴史、司馬遼太郎の『街道をゆく』にも出てくるのですが、見ていると、人がいろんな形で昔は行きかう、そういう街道沿いに必然的に出来上がってきたまち、地域であります。熊野古道の存在感というもの、果無集落に行ったときに、圧倒的な存在感を感じました。そう

いう感覚、従来の価値観から考えると不便だとか、医療施設はどののだろうか、大きなアミューズメントセンターもないとか、思う人もいるかもしれませんが、十津川のようなところが持っているものがこれからは大事になる。

フォーラムの基調講演の中で中村先生がおっしゃっていましたが、十津川では時計を忘れて、文明、そういうものから頭を解きほぐして、離れて、もっと違うか

たちで感性が刺激される、日の出から日没まで、いろんな想像力を働かせながら思いを致すようなことが出来るのでは。そういう地域として十津川は常にいろんな人たちの会話の中に出てくるような地域であってほしいなと思います。

時々、十津川村のことでまた集まるようなことがあったらいいと思います。その集まり方はオンラインももちろんあるし、リアルでということもある。それぞれがそこで集まったことによって、それぞれの思いを満たす。そういうものとしてずっと存在してほしいと思います。

これからのコロナを見据えたまちづくりには、今までとは違う場づくりが大事。みんなでどんな風に作っていくのか、そのあたりを考えていきたいものです。地域への入り方は難しくて、以前群馬県南牧村に行ったときに、若い人で入ってきてもなかなかうまく地域に溶け込めなくて、あるいは地域の人たちも受け入れられなくて、やがて出ていく人が結構いるというはなしを聞きました。余裕をもった入り方をいま作り出せるといいな、ということを思います。

※昨年年11月十津川村を訪れたスローライフ学会↓



---

【質疑】

●は感想・質問

【】は居住地

○は増田さんの答え

---

●岸田首相のデジタル田園国家構想への評価は。

○所信表明は二度おこなわれているが、そのことについてはほとんど語っていない。内容にはこれから哲学をつかっていかれるのか、という感じがする。

●子ども達をメタバースに追いやるようなビジネスと、デジタルを使って地方創生する、そのあたりをどう考えるか。デジタルというならオンライン診療を徹底的にやるとか、どこかにフォーカスしワンポイントでやっていく必要はないか。

○デジタルはいずれにしても手段、地域が目指す姿は各人に想いがあると思うので、それをはっきりさせていく。全部を統一させていくのは難しく、ある方は医療、ある方は教育だと。大所のところを一つにというか、どれが正解ということは多分なくて、一人一人の生き方が全部違うように、地域にとってみても、その中で最大公約数ができるだけ探していくというのが大事。

何でもかんでも東京の価値が一番いいというのはおかしくて、もっと地方の良さも考えていくべき。価値軸を東京、大きい強いものが勝つみたいなことにあててしまうと最後には東京しか残らない。違う価値軸を地域で見つけていくことが大事だ。

●地域と多様にかかわる人と考えると、関係人口は量よりも質を高めるところが大事と思う。しかし、地方創生とかまちづくりを進めていくうえで、どうしても量的な評価が



中心になるし、そうでない客観的な評価をしようとしても満足度とか、どうしても量的な評価になりがちなのが正直な実態だ。それぞれの地域で、考え方の中で目標を持っていくのは大事だが、その評価についてはどのように考えれば。

○関係人口は数ではなくて、それぞれの関係、地域から見て地域にとって好ましい関係ってなんなのか全部違うはずだ。5人でも地域にはプラスのこともあるし、100人200人いて手伝ってくれるというのはプラスにはなるけれど、それだけで終わってしまうということになれば、地域にとってはトータルではプラスにならない場合もある。地域に関心を持つ人がいるというのは重要だが、その中身によってだ。

評価というのは、私もその通りだと思っている。PDCA サイクル、数値目標といわれるが私はクセモノだと思う。一面的で平べったく薄いものになってきて、例えば役所の担当職員の人たちはとにかく数値目標達成すれば、そのとたんに全部忘れて万歳しておしまいみたいな感じになりつつある、あまりそれをふりかざさない方がいい。ただ、やっただけで振り返らないというのはよくないので、数値目標だとか量的なことにとらわれない、次の世代の人たちにこれだけは希望を与えているんだという、そう

いう確固たるものをみつけ出すことが重要かと思う。最後には、いいと思ったことは自信を持って言い切る、そういう力、強さみたいなことになる。

●目指すところが多様性で、いろんなところがあれば評価も質的なことで評価すれば共通した評価ができるかもしれない。評価するものによって評価が違うというのもある意味の多様性かなと思う。

○要はまちづくりなので、全部が同じ方向だと逆に変な気がする。むしろまちの価値って多様だから、その方が健全だ。

●愛媛県今治市で有機の農業を推進しながら、学校給食を全部有機給食にしていくという取り組みを20年以上やっている。その評価をどうやっていったかが面白い。実際に食べている子ども達、例えば小学2・3年生が有機の給食を食べる、その子達が中学生、高校生になるという風に時間軸を追って、地域の食材に対してどういう意識をもっているかを調査をした。すると有機の給食を食べていた子達はその町をすごく愛していて、しかもその町の産物とか食事に関して非常に関心を持っている、という評価が出た。まちづくりも今から5年後10年後、いわゆる時間軸を伴った考え方を取り入れられないのか。

○まちづくりを考えていくときに、生産年齢人口というか、主役になる年代がどの人たちなのか、町の姿をつくっていくには時間がかかるので、こういう町にしていこうと考えて実現していくときに、一体誰がそれを受け止めるのかを考える。世代交代、大体一世代というのは30年と理解されていると思うが、30年先を目指したまちづくりまでできれば本当は望ましい。10年なら主力の世代が三分の一くらい変わって、20年後に三分の二、最後全部世代が入れ替わるくらいの時間軸の中でまちづくりを考えていく。

今治の事例は地域性、地域とのつながりが見えてくるから貴重だ。自分たちのここで作った地域のもの、同時にストーリーがあればよけそうといったことを通じて食物連鎖とか資源循環へ想いはだんだんいく。学校給食とか農業についてのストーリーが合わせて語られると余計だ。一次生産の地域も大事だし、二次のところ、サービス産業が主役のところ、そういうものもバランスよく配置された地域にしていこうという話につながっていくようになるかもしれない。

●デジタルとスローライフというライフスタイルは対立するものか、共存するもの両立できるものなのか。



●我々こうしてオンラインも利用していることもそうだが、緩急自在で上手に使いこなす、自在に使うことの方が重要だと思う。

○うまく使いこなして、スローなことを実践する余力を作り出すことが大事。

●その話では、神野直

彦先生が「何のためのデジタルか」というと、「人と人の会う時間を増やすためのデジタルです」とおっしゃっていたのが印象深く、デジタルというのはそういうものだと思っている。両立するとかよりもスロー化するためにデジタルが必要なのでは。

●まちづくりの評価に関して、数字だと一元的だとか、時間的な軸が必要だとか、それぞれ正しいと思うが、今の地方創生が根本的に間違っているのは、その評価を住民でなくて、国がしているところだ。国が交付金を撒くからといって、地方創生のプランを作らせて、自治体が頑張っただけでプランを作って、それを国が評価しているというところが最大の難点だ。住民が評価できるようなまちづくりをすればいい、根本から変えていかないと。地方創生、この言葉も嫌いだ、誰が評価するのかということをやっとみんなで考えた方がいいのではないかな。

●私自身は SNS を利用して、いろんな発信をしている。そのおかげで、スローライフに関わって学びが大事なことだと皆さんに教えられた。いま南牧村では移住者が増えいろいろなことが始まっている。地域を知る学びがすごく大事だ。子ども達は全部タブレットで勉強しているが、ここでは5Gが使えない。電波がどこでも使える国にしたい。繋がるということが一番大事なことです。

○5G の環境が整わないという問題は解決しなくてはいけない。外の人たちがいっぱい入ってくるということはすごくいいこと。数にこだわる必要はない、外との交流が、活発になるということが重要だ。確かに人口は減るけれど、そこに飛び込んでくる人を温かく受け入れられるのが大事。

●中村桂子さんが最初に話されていた、人間も生きものの一つなのだという話と、増田さんが最後に図で説明した、人も自然の

一部である、ということ。これはとても重く受け止めて、大事だなとすごく感じて、さあどうしようかということ胸に刻んだ時間となった。

●地域にいと経済の問題が出てくる。仕事がないから若者は来ない。まずそこから。何か経済だけを目指すまちづくりが地方にはあって、高速道路をつくらないとダメだとか、空港がないとか。今日のお話のなかで自然という中で生き方の部分を問いただしてくれたのかなと。

●高校、農業科や商業科の生徒たちは就職してかなり貧困な状況に置かれることが多い。明日を生きるのが精一杯というような若者が今、増えている。2000年に生まれ、コロナ禍も生き抜いて、デジタルネイティブである彼らが地域ではどうかかわり方だとか、どのようにやっていくと彼らが幸せになる方法があるか。

●何か現場で実際にどんな感触を持っているのか。

●就職していく生徒が実業科では半分。就職理由は、生活のため、生きていくために、困らないためには自分でお金を何とか用意していかなくてはならない。一所懸命就職して生きるために働いた後に、心や体を壊してしまうケースが多数ある。

●今コロナ禍でアルバイトが減って大変だという学生もいる。中学生くらいから先々の仕事を、どうやって食べていけるのかというのを考えなくてはいけないという、たぶん子ども達も、社会全体も保護者の方もものすごく焦っている。だから高校選びも、大学選びも一生懸命食べていけるのかどうか、という視点から選ぶ。日本の社会全体が縮まっている感じ。60代以上の方々は、成長する経済の中でいい時代を過ごした。だから自分とおなじような成長のビジョンしか

描けない、子ども達を導くという焦りが、学生たちに反映されている。多分全く別の価値観を持たなくてはいけないということだ。

●大学教員の立場で学生の就職の面倒をみている。学生の価値観がかなり変わっている。就職に求めることが以前は年収・働く条件が多かったが、今は自己実現がどのくらいできるか。自分の好きな事とか、自分が社会の中で何を表現できるのかを追求する学生が増えている。例えばリターンだとか、インターン就職とか、ご両親を幸せにしたいとか、将来の奥さんを幸せにしたいとか、或は地球環境に貢献したいとか、すごく多様化してきている。今までのような固定化された概念のなかでなく、何らかの形で自分の価値観を実現したいという、実現できる将来を見つけられれば幸せな生活ができる、それを支援させていただければと思う。

●最後の質問に対して一つは言葉として出すには、ちょっと厳しいが、甘えるな、という事。今の日本の状況をどの位置でみているかという、位置の俯瞰性みたいなこと、そこが見えていないのに悩んでいるということ自体が本当の悩みじゃない。今の若者は当然何種類もいて、日本を丸ごとみると内向的になりすぎている気もする、その中での悩みのような気もする。我々の世代が寄り添うだけではなくて、突き放すという

か。子どもに対して寄り添いすぎる怖さを感じている。

○Z世代は完全に私等と発想が違っている。ただ大事なものは、収入というのは大事な要素かもしれないが、自分のやる事が社会的に意義がある、ということを考えてもらえるような、そういう環境づくりができればいい。

あと、国が評価するのは変という意見があったが。それはそれとして、住民は住民で評価するということが大事。息の長い評価は住民がやっていく。十津川みたいに1000年以上続いてきた地域というのは、その間にいろんなことを経験されてきて、やはり生き抜くものは生き抜くなと思った。

.....  
(まとめ 事務局 小松崎いずみ・野口智子)

※↓十津川村果無集落、熊野古道

